

どれが源頼朝の肖像画なのか？

京都の神護寺に伝わる「伝源頼朝像」「伝平重盛像」「伝藤原光能像」は、国宝に指定されている肖像画である。この神護寺三像のうちとくに有名なのが「伝源頼朝像」であり、その面貌を、ほとんどの人が源頼朝だと思ってきたのであった。

神護寺像は頼朝ではない しかし、1995年3月に米倉迪夫著『源頼朝像 沈黙の肖像画』（平凡社）が出て、事情が一変した。この本によれば、神護寺の「伝源頼朝像」にはどこにも源頼朝像であることを示す記載がない。それが源頼朝像とされるようになったのは江戸時代のことであり、その根拠は、南北朝に編まれた『神護寺略記』の記事と結びつけられたからであったが、それは誤りである。神護寺三像と関連づけられるべきは、康永四（1345）年の足利直義願文なのである。同願文によれば、その年に兄尊氏と自分の肖像画を作って神護寺に納めたとあり、従来「伝平重盛像」とされたきたのは足利尊氏像であり、「伝源頼朝像」と呼ばれてきたのが、実は足利直義像であることを、極めて説得力のある論述をもって示されたのであった。

この衝撃的な新説が出てから、通説すなわちこの肖像画は鎌倉初期の作品であり、源頼朝像と見てよいとする説に立つ研究者と、米倉および彼の新説を支持するわたしなどとの間に論争が始まった。これまでのところでは、通説側の論者が出した反論はすべて、新説側によって否定されてしまっている状況にある。但し、「伝源頼朝像」はこれまで、13世紀初期の肖像画の傑作として、日本美術史の基準的作品とされてきただけに、通説のままですとす美術史家たちの声なき声が、今でも通説を支えているというのが現状であろう。

しかし、このように強力な米倉説が出された以上、挿絵などに源頼朝の肖像を使う際には、それなりの判断が必要になった。そして、神護寺の「伝源頼朝像」を避け、たとえば東京国立博物館にある「伝源頼朝像」を利用する場合などが増加している状況にある。（私見では、この肖像も源頼朝像である確かな証拠がなく、むしろ他の人物のものである可能性が高いのだが。）

ところで、神護寺の「伝源頼朝像」は源頼朝に似ているかといえ、そうではない。わたしの論文「肖像

としての源頼朝」（『立正史学』96号、2004年）で指摘したように、源頼朝という実在の人物は顔が大きく、背の

低い人物であった。つまり小柄で頭でっかちのプロポーション。それに対して、神護寺の「伝源頼朝像」に描かれた人物は実際にプロポーションがよく、七頭身前後に見える。この点からも、「伝源頼朝像」に描かれているのは、源頼朝ではないということになるであろう。論拠はまだ幾つも挙げられるが、「伝源頼朝像」は源頼朝を描いたものではない。

実在に近い「源頼朝像」 では、源頼朝像として最もふさわしい肖像、実際の源頼朝の面貌や姿に近い肖像とは、いったいどれであろうか。結論的にいえば、現存する源頼朝像とされている肖像画・肖像彫刻のなかで、実在の源頼朝に文句なく近いのは、甲府善光寺（甲斐善光寺）にある源頼朝像（彫刻）である。

鎌倉時代に造られたことが確認できる、現存唯一の源頼朝像なのである。同像には文保三（1319）年の胎内銘があり、そこには源頼朝像であることが明記されている。わたしの推測では、面貌（首）は鎌倉中期にまで遡ると思われる。

それは遺像（死後に造られた像）であり、源頼朝が亡くなった53歳の年齢にふさわしい面貌をしている。しかも、その威厳に満ちた面貌は、明らかに大顔である。

この肖像はもとは信濃善光寺にあったのだが、戦国時代に甲府へ移されたのであった。源頼朝は信濃善光寺の復興に大きな役割を果たしたので、本像が鎌倉時代に造像され、信濃善光寺に安置されていたことは自然である。

したがって、鎌倉時代の唯一の源頼朝像であり、しかも源頼朝に似ている可能性が最も高い肖像甲府善光寺の源頼朝像こそは、歴史教科書などの挿絵として用いられるべき肖像なのである。

（立正大学教授 黒田日出男）